

「アドヴァンス・サロン」一九七九年三月（ADE研究会）

● 対談風評論

海外技術協力への期待

矢口 新

A 先生、中国からの技術協力の要請が大変のようですね。うまく行くと思いますが。これで日本の不景気もこれで解消するのでは。

B お前そんな考え方だからだめなんだよ。今度こそは中国に恩返しをするよう時だな。そう考えるべきなんだな。

A 恩返しだなんて、そんな時代的な、先生は。

B アハハ・・・。恩返しはちと大時代かもしれないが。しかし、よく考えてみなさい。日本は二千年以上中国から文化を受けてきたのだよ。ものの考え方も、生活の習慣も、早い話が言葉も、文字も。そう考えると、これは恩などというものではないでしょう。もつと深いつながりのある文化の兄弟なんだというべきでしょう。考えようによっては、単なる血のつながり以上でしょう。だから金

もうけなんて問題じゃないんだよ。いや商売はかまわないんだが、その底にもう一つ仁義があるんだよ。おや、これはまた大時代になったな。

A いやわかりますよ先生。つまり人間関係が大切だということなんでしょう。そういえば確かに二つの民族は、ずいぶん長い付き合いなんです。いや、つき合いなんてもんじやない。わたし達の心の中には、中国人の生み出した文化が住んでいますね。

B おう、お前もなかなかいい事を言うね。その通りだよ。だが二十世紀は、日本は中国に対していい事をしなかったね。大体隣りの人に対する態度じゃない。この辺が日本の大失敗のはじまりだよ。太平洋戦争の敗戦も、本当はそういう日本人の心がうみだしたんだよ。

A なるほどねえ。仁義を失っては

人間は生きて行けませんねえ。近代語でいえばモラルですよ、先生。

B お前、今日はなかなか冴えとるぞ。ところで、だからこれからの日中関係は単なる取引じゃない。文化のつながりの復活なんだよ。わかるかな。

A わかりますよ、先生。中国が今技術協力を求めているから、技術輸出する時だということなんでしょう。日本の文化がこんどは中国のためになるということですね。

B そうだ。こんどは中国の発展のために、本当の力になることを考える時だな。

A しかし先生、それはちよつと考え物ですよ。日本の技術をむやみに輸出したら、日本の商売が成り立たなくなるんじゃないんですか。

B だから、技術協力はしないというのかな。

A いや、いい加減のところ協力するのです。

B なるほど、出し惜しみをするとこのだね。日本人らしい考え方だね。だが、それでどうなるというのだね。科学や技術には本来国境がないものだからね。遅かれ早かれ、結局は中国は科学や技術をものにする

だろうよ。そして残るのは、あの時日本はケチをしやがった、ということになるのがオチさ。それでいいのかね。

A なるほど、そうなると面白いな感情だけが残るということになりませぬ。

B それがわかればよいが、問題はむしろそれからなんだよ。君はどう思う。技術を輸出するか、技術協力とかというのは、そもそもどういうことだと思ふ。

A それはもちろん機械とかプラントとか、そういうものを持って行くことでしょう。

B だと思ふだろう。それが素人の浅ましさだ。本当は教育なんだよ。つまり人を育てることさ。しかしそれは学校へ入れるということではないよ。もつと具体的な生産の現場で人を育てることなんだよ。技術というのはやはり人間の持ち物なのさ。

A そう言えば、中国は日本の工場へたくさん人を勉強によこすそうですよ。そこで技術を本当にものにしようということなんですね。しかしそれはいいな。技術協力が人間的結びつきをつくることになりませぬ。中国的に言うくと、中日人民の友好が

成立する・・・。

B そういうことだな。うまくゆけば・・・。しかしなかなかそうはならんかもしれん。

A どうしてですか。

B 君は戦前のことは知らんだろうが、戦前も日本へたくさん留学生が中国から来たのだが、その中から排日運動するものが多く出たんだよ。今度はそういうことをくりかえしたくないけれども、それが心細いな。

現に東南アジア方面からの留学生のかなり多くが、反日学生になっているという実績があるからね。日本社会の持っている体質が問題なんだね。

A それは困るな。どこに問題があるのでしょうかね。

B 東南アジアの人たちに、日本は西ばかり向いていると言われるのはそれなんだよ。妙な大国意識、差別意識が向こうの人には感ぜられるのだよ。ここ百年間日本は、ヨーロッパ、アメリカばかり向いてきたからね。外務省の役人でも出世コースはヨーロッパ、アメリカ駐在で、その他の国へ行くのは落ちこぼれたなんて言われているからね。日本人のいやらしさが出るのだな。まあ、言っ

てみれば成り上がり根性なのだね。

エコノミックアニマルと言われる行動も、不評判の一翼をかつているしね。

A そういうふうになると根が深いですね。

B まだあるよ。これからは恐らく企業が留学生をたくさん受け入れて生産の現場であちらの人達を教えることになるだろうが、そうなったとき本場に教育できる企業がどれくらいあるかな。そういう力はほとんどの企業は持っていないのではないかな。

A そんなことはないでしょう。これだけ高い技術を持っている日本なのですから。

B そう思うだろう。ところがそうはいかなさそうだよ。これはなかなかむつかしい問題で、ちよつと気がつかないところなのだが、だいたい企業の現場では、終身雇用で、なんとなく職場に入って長い間になんとかなく仕事を覚えるという形が多いのだよ。しかも学歴社会とか、年功序列とかもからんで、ホワイト、ブルーの区別もとれていない。だから現場の作業員といわれる人は、一つの職場に五年、十年、長いのは二十年

とべったりくつついて仕事をやってる人が多い。

そういう状態では実をいうと、教育ということが、本場に考えられないのだな。する方もされる方もな

となく甘さがある。一種の島国的家族集団というムードで、なんとかなさという態度で勉強している。甘えの構造なんだよ。そういうえば受験戦争などと言うのも、島国の中の現象だと言つてよさそうだな。役にも立たんテストなんか浮身をやつして騒いでいるなんて、まったく天下泰平だな。世界の中で生きていくには、もっと大切な勉強がいくらもあるのに、そんなことは忘れて、偏差値ばかり問題にして、あげく最終の大学では学生は何を勉強しているのか・・・。

おつと横道にそれだが、そういう状況だから、職場の仕事に本当に必要な学習は、どういふもので、どのようにして働く人を育てるのかをしっかりと考えている企業は余りないんだな。その証拠に企業では一つの職場に組み込まれて十年、単純労働を続けているなんていう人が多いからね。その意味では本場に高い技術というものはまだまだなんだよ。もつ

ともこれはアメリカでも大して変わりはない。近代産業の人間の使い方なんだがね。つまりロボット化だよ。

A そういふ技術社会の形態を中国はどう感ずるでしょうね。

B そうなんだ。近代化が管理社会を生み出していくことには、中国は大きな疑問を感じているからね。中国では、それはもうかなり長い間の問題となっているよ。

A そうすると中国はそういう観点から近代技術社会をどう見てどのよう受け取つて行くかは、これからの興味ある問題ですね。

B 管理社会の弊害をどう排除するかは日本でも考えていかねばならぬ問題だが、それは根本的には人間の問題、教育の問題なのだよ。そういう意味でも、日中の交流というのは意味のあることだな。

A 先生、今日は大変勉強になりましたよ。ありがとうございました。